目病み猫と水のない水槽

川津羊太郎

ほぼ何もない素舞台。
かすかに雨の音が聞こえる。
舞台奥の壁に、四角く限どられた光りがあって、その光りの窓に、雨筋が伝っていく。
やがて、開演の合図とともに、溶暗――

1

闇。
しだいに闇が明けると、暗がりのなかに男と女が並んで立っている。
彼らは人形のように身動きひとつしない。
やがて、男に生気が宿る。

男　その部屋には、水槽がありました。
女　（生気が宿って）水槽――？
男　そう。水槽。何も入っていない、空っぽの水槽。
女　アクリル製の、よく見れば、細かい傷がびっしりついた、水槽。
男　殺風景なアパートの一室で、ワンルーム８帖の部屋のほとんど中央に、でーんと、その水槽は置かれていました。
女　水槽――
男　そう、水槽。
女　だいたいどのくらいの大きさの水槽かと言うと、まあ、このくらい？　の。
と、男と女がそれぞれ水槽のサイズを両手で示すが、その大きさがバラバラ。
ふたり、チラッと顔を見合わせて――
男が、さりげなく女の示す大きさに合わせる。
女　（うなずいて）六〇㎝水槽といって、まあ、ごく一般的な大きさの。幼い茶トラが

はじめて部屋に連れてこられたときから、その水槽は部屋の中央に、でーんと。

男　まぶしい昼の陽にたっぷり浸された水槽の輪郭が、部屋のなか、やわらかい光りとなって滲んでいました。

男と女　ちょうど、こんなふうに。

男と女のあいだ、舞台奥の壁に、ぼんやりした白い光りが浮かぶ。

光りのなかに、「1．目病み猫」という文字が現れる。

やがて壁の四角い光りが小さく収縮し、その小さな四角が、壁のあちこちに幾つも並ぶ。

女　その茶トラの目病み猫は、薄暗い店内で、せまいプラスチック製のケージに閉じこめられて、敷きつめた皺だらけの新聞紙の隅に丸くなって眠っていました。

男　そこは、町の小さなペットショップ――いやペットショップっていうより、動物屋、みたいな感じの店で。太った女店主が切り盛りしていて、といっても、客とかそんなに、いつ行ってもいない感じの。

女　ここ数日、にきび面の若い青年が、その店に毎日みたいに通っていました。

男　青年はいつも、生気のないあばた顔を、こうケージにくっつけるようにして、ある一匹の長毛種を熱心に眺めていました。

女　長毛種。あの、毛の長いヤツ。ヒマラヤンとか、チョコレート・ペルシャとか。

ときどき女店主が話しかけようとすると、青年は、

男　あ…ゥヤ……

女　と吃った声でぶつぶつなにか呟いて、きまって足早に店を去っていきました。

男　そんなことが何日か続いて、

女　ある小雨の降る日でした。にきび面の青年が、いつも現れるよりもすこし早い時間帯に、来店しました。彼はその日、ひそかに、ある決意を胸に固めていました。

男　彼は、店に来る直前に、駅前の郵便局でなけなしの貯金を下ろしてました。

女　青年はいつも夢中で眺めている長毛種のケージの前に立つと、間の抜けた話ですけど、ほとんどこのとき初めて、ケージの前に貼ってある、値札、というものを読みました。

男　はァ？　ィや……マジ？　は？　（と、しつこく金額の桁を数える）

女　――そして、しばらく青年は、焦点が合ってるのか合ってないのか分からない目つ

きで、ふらふら店内を眺めて、

（女のとなりで男がふらふら周囲を見まわすと、そのたび舞台奥の壁に映った四角い光りが、ひとつずつ消えていく。やがて、光りがひとつだけ残って）――たぶん、これまで一度も見向きもしなかった、目病み猫のケージに目を留めました。そのケージに、というか、そこに貼ってある値札に、彼は目を留めて、しばらくじっと見下ろして、おずおずと、女店主を呼びました。

男　すいません……あのゥ、コレ……

女　その茶トラは、結膜炎のせいで両目に粘っこい目ダレがこびりついていて、ほとんど目も開けられない有様でした。奥から出てきた女店主は、小ぶりのダンボール箱に取っ手をつけたみたいな、粗末な猫かごに、皺くちゃの新聞紙を何枚も敷いて、猫の入ったケージからニャアニャア鳴く目病み猫を無造作に摑みあげて、ティッシュでこう、ごしごし目ダレをふき取って。まるで焼き芋を図り売りするみたいな手つきで、猫をダンボールのなかに放りこみました。「はいどうぞ」

男　「どぅも……」青年は代金を支払うと、逃げるように店を出ていきました。

女　その青年の曲がった背中をレジのカウンターごしに見送りながら、太った女店主はほんの一瞬だけ、子猫と別れる感傷に浸れそうな予感はないかとじぶんの胸のうちをまさぐるのだけれど、でも、いつもそんな予感はなくて、昔、彼女がまだ若かったころみたいな感情が胸に蘇ることは、もうなくて、店のカウンターで、誰にも分からない、おし殺したため息をつく。

舞台奥の四角い光りが、乱雑に揺れはじめる。

男　青年は店を出ると、傘も差さず、冷たい外気に頬をつっ張らせて、帰路を走った。ダンボール製の猫かごをこう、胸のまえで、両手で抱えて。

女　ダンボールに敷きつめられた新聞紙が、ガサガサ大きな音を立てて。なかの暗がりでは、揺れる床に必死で足をふんばって、

男　でも何度もダンボールの壁に体ごとぶつかって、目ダレにまみれた茶トラの猫は、何度か、ウェ、ウェ、と黄色い液体を吐きました。

女　それから金属質の扉が開く音。扉が閉じる音。そしてまた振動。

男　そのあと、ようやく揺れがおさまると、

女　こんどはダンボールの壁の外からガサゴソ物音がして、かごの天井が開きました。
男　まぶしい光りが差しこんで――茶トラの弱った網膜を焼いた。

まばゆい光りが、壁の四角い光りを塗りつぶしていく。
やがてその光りが落ちつくと、舞台の壁と床に、８帖ほどの空間を描きだされる。

女　怯えてダンボールの隅っこにうずくまっていると、開いた天井から巨大な二本の手がぬっと現れて、茶トラの体を持ちあげた。両目を覆う黄ばんだ目ダレの向こうに、昼の陽にたっぷり浸された水槽の輪郭が、やわらかい光りとなって滲みあがった。
男　あばた顔の青年は、肩で息をしてました。普段からぜんぜん運動なんかしてないせいで、ちょっとした距離を走っただけなのに、まだ心臓がバクバクしてて。寒いのにダラダラ汗を流して、その汗と小雨が混ざったものに体を冷やされながら、青年は店からこのアパートまで小走りに走って、アパートの階段をダンダン上って、カギを開けるのももどかしく、部屋に上がって、上がるなり畳のうえに座りこんで、ダンボールの猫かごの蓋を開けたのです。
女　でも、かごのなかの暗がりには、もともと根拠もなく肥大した青年の期待？　思惑？をよそに、吐瀉物に汚れた目病み猫が、怯えて丸くなっているのでした。
男　それを見たとたん、なんか、こう、堪えがたい衝動に、ガツッと後頭部を撃たれて。
女　にきび面の青年は腕を伸ばして、両手で猫を掴みあげました。
男　とつぜん青白い骨ばった手に握りしめられた幼い猫は、体毛の先を小刻みに震わせながら、青年の吐く息の臭いに鼻をゆがめた。
女　子猫が、青年の手のなかでもがいて、幼い後ろ足の爪で、青年の手の甲にいくつも白い引っ掻きあとをつけて、
男　青年が手を放すと、
女　畳のうえに着地するなり、ひょこひょこ、とぎこちない足つきで逃げだして、
男　部屋のなかを右往左往したあげく、カーテンの後ろに身をひそめました。青年はぼんやりそれを眺めて、
女　それからふと、じぶんの指先についた黄色いネバネバした液体に気づきました。
男　（自分の指先を見つめて）ゥわ、マジか、これ……
女　青年は頭のなかで、子供のころからの癖である、意味のない足し算をはじめました。

男　（ボソボソと）四、三、七。七、六、十三、三、三、六……

女　カーテンの陰で、目病み猫は、さかだった体毛を熱心に舐めはじめました。

男　青年は、その猫の様子を無感動に眺めて、それから部屋の隅に置いてあったカバンのなかからスケッチブックと粗く削った鉛筆を取りだすと、真っ白な紙のうえに、大雑把な手つきで、いくつも線を、書きつけた。

女　一見乱暴に見える線のあつまりは、みるみる輪郭を浮かばせて、そこに、毛に模様をもたない猫のぬけがらが現れました。無地無名のその猫は、目ダレで汚れた目を細めて、柔らかい姿態でじぶんの下腹を舐めていました。ときどき舐めにくい毛の乱れをしつこく甘噛みして、抜けた毛を、アグアグ飲みこんで。

男　青年は鉛筆を走らせるうちにだんだん興に乗ってきて、棚からポラロイドカメラを持ってきて、目病みの猫に向かって、

バシャン、と無遠慮なフラッシュが炊かれる。

女　とつぜんの光りに驚いて、茶トラはめくらめっぽう逃げだして、テーブルの足に頭をぶつけながら、炊飯器なんかを置いてあるカラーボックスの一番下の段に飛びこみました。

男　猫が慌てふためいて逃げていく格好は、ちょっと滑稽だった。へへ。

——でも、よく見ると、逃げてった猫のあとに、なんか黒いシミが点々と残って、近寄って嗅いでみると——くさッ！

女　茶トラは逃げながらおしっこを漏らしてて、それを見て、初めて青年は、じぶんが猫のトイレすら買い忘れてることに気づく、という始末でした。

男がため息をつきながら、雑巾で畳のうえを拭いていく格好。

女は、その男を慎重に迂回して、８帖の部屋のなかを歩きまわる。

女　築の古いそのアパートの部屋は、茶トラにとって、満足のいく広さとは言えませんでした。床のおもらしをふき終わった青年が、水道水の入った小皿を置いてさっさと出かけてしまうと、目病み猫はおずおずと物陰から出てきて、部屋を探索しはじめました。

男、いつのまにか四つ足の猫となり、部屋の匂いを嗅いでまわる。

女　畳のうえには薄いカーペットが敷かれていて、そのカーペットから、安っぽいコロンの匂いが立ちのぼってくる。カーペットにはところどころに丸く焦げた跡があって、茶トラはそれを慎重に避けて歩きました。

男　部屋のほぼ真ん中にテーブルがあって、その脇に汗の匂いのする座椅子。押入れの手前に、雑に折りたたまれた布団。そこからも汗の匂い。壁ぎわに本棚。底の抜けそうな錆びたベランダに通じるガラス窓。その窓とは反対側の部屋の一角が、３つ並べたカラーボックスで仕切られてて、その向こうには狭い流し台がありました。嗅いだことのない、食いものの匂い。腹が鳴る。

女　そこは形ばかりのキッチンで、ボックスタイプの小さな冷蔵庫も床にじか置きされていました。そのすぐ隣りが玄関。玄関わきにドアがひとつ。そのドアは換気のために、いつも少しだけ開放されていて、なかにはミニチュアみたいな浴槽と便器。

男　ここは、とくにカビ臭い。

女　それから――部屋のほぼ中央の、テーブルのうえに置かれたアクリル水槽。テーブルのうえに散乱する空っぽの缶コーラや食べかけのスナック菓子の袋を、押しのけるようにして、魚も何も泳いでいない、透明な水が満たされただけの水槽が、でーんと。それだけ。ほとんどそだけが、茶トラの目病み猫が連れてこられた、新世界のすべてでした。

男　茶トラは、ほとんど霧のなかにいるみたいな白濁した視界のなかで、この新しい世界の匂いを、ひとつひとつ丁寧に嗅いでいきました。床に沈みこんだ濃密な空気を、全身の毛にまといつかせながら。

女　日が暮れはじめて、夕方になっても、あの青年はなかなか帰ってきませんでした。

男　カーテンが開いたままのガラス窓から、夜の暗がりが沁みこんで、エアポンプも濾過システムも作動してない水槽に溶けこんだ昼の陽の、残り火のようなあたたかさを、ゆっくりと奪っていきました。

部屋を象っていた光りが、徐々に闇に溶けていく。男が立ちあがって、女と並び立つ。まるで人形のように立つふたり。彼らに、ふたたび生気が宿って、

女　夜更けになって、青年は酒気を帯びた顔つきで帰宅しました。ガチャガチャ鍵穴を鳴らしながら騒々しく帰ってくると、陽気に猫用のトイレを設置して、折りたたんだ布団に倒れこむようにして眠ってしまいました。

男　でも茶トラは店できびしくシツケされてたので、青年のやかましい高いびきを尻目に、ちゃんと玄関脇に新設されたトイレに駆けこんで、用を足しました。用を足したあとは、ちゃんと後ろ足で、化学合成の砂をかけて。

女　翌朝、猫の鳴き声がいつまでもやまないのに起こされた青年は、水道水で顔を洗って、長いことトイレにこもったあと、しつこく足もとにまとわりついてくる猫をふんづけて、ようやくエサを買い忘れているのに気づきました。

男　青年は何種類も、たぶんそのときスーパーに置いてあっただけの種類の缶詰を買ってきて、それから朝晩二回ずつ、一日ごとに違う味を猫に与えました。

女　茶トラはどんな味でも、えり好みせずによく食べました。

男　青年はしばらくいろんな味を試してみましたが、何を与えても猫の食べっぷりに変わりばえがないのを見ると、ガッカリして、結局一番安い缶詰しか買ってこなくなりました。

女　まだ薄暗い店にいたころ、茶トラはあまり鳴かない性質（たち）でした。

男　でもこの部屋に来てからは、よく鳴いた。まずエサのことで鳴いた。

女　水のことでも鳴いて、トイレのことでも鳴いた。玄関のドアの向こうが気になって鳴いて、あんまり鳴くと青年に叱られて、それでまた鳴いた。

男　青年はほとんどこの部屋から外出をせず、たまに出かけても基本、すぐに帰ってくる。気が弱ったときなんかは、一週間まるまる部屋から出ないこともあった。

女　そして青年はいわゆる癇癪もちでした。

男　そとの通りの街路樹が水気を宿して、窓から吹きこむ空気が暖かくなってくると、幼い茶トラは昼となく夜となく、喉からこみあげる粘っこい鳴き声を部屋じゅうにまき散らしました。

女　アオォォ〜、アウォォ〜。

男　でも青年はそれを許さず、平手打ちしました。

女　ある日、めずらしく彼が一日外出して、夜になってからアパートに帰ってくると、これまで嗅いだことのない臭いが部屋のなかに充満していて。

男　くんくん鼻を鳴らして臭いの元を辿っていくと、それは、本棚の一段目から。
女　茶トラが、そこに並んでる本に、尿を噴きかけた臭いでした。マーキング？　っていうか。
男　そんときは、青年も「マジか」ってくらいキレて、あれ、何だろ、布団たたき？　を持ってきて、茶トラを玄関の隅に追いつめて、何度も打ちすえました。
女　猫は、悲鳴と威嚇の声をあげて抵抗しました。か弱い抵抗だけど。
男　それから青年は、顔面の筋肉をひき攣らせたまま、異臭のする本を――それは、彼が通う学校の教本らしくて、「美学概論」とか「西洋壁画史」とか、そういう本を、一冊一冊雑巾でぬぐって、ひんやりするベランダの暗がりで、物干し竿にぶら下げて。
女　彼の部屋にある持ち物とか、そういうのから判断すると、どうも青年は学生であるらしかったのですが、それにしては、普段学校に通っているふうには見えませんでした。ただ、ときどきどこからか課題を持ち帰ってきて、一日画版の前でウンウン唸っていることはありました。まあ、基本、唸るだけなんですけど。
男　目病み猫が部屋に来て一月も経つと、目ダレもだいぶマシになって、ようやく見た目も普通の猫と違わなくなってきました。ただやっぱり視力はちょっと弱いみたいで、テーブルの足とかには、フツウに歩いてて、よく頭をぶつけたりとかは。まあ、あったり。

唐突に、電話の呼びだし音が、二度、三度。

男　ごくたまに、部屋に電話が鳴り響くことがあって、その電話のほとんど１００％は、彼の田舎からでした。
女　気だるそうに重い腰をあげて受話器をとった青年は、いつもの疲弊した目つきのまま、でも口だけは急に饒舌になって、
男　何度も舌を空回りさせながら、いろんな言葉をまき散らした。
女　そんな青年の身動きに合わせて、受話器から垂れるコードが揺れて、茶トラは目をまん丸にしてそれに飛びつき、
男　その一瞬、田舎からの音声が途絶えて、カッとなった青年は猫を
――足蹴にして追いやりました。

女　――足蹴にして追いやられました。

舞台上に、窓から射しこむ春の午後の陽ざし。

男　気候が暖かくなると、茶トラは窓べりに寝そべるのを好むようになりました。

女　ひとつには、そうやってカーテンの陰に隠れておけば、そのぶん青年の目に留まるのも減って、叩かれずに済むし。

男　なにより、外の景色を眺めるのが、愉しかった。

女　窓ごしに見える景色というのは、（右手側を示して）こっち側のほぼ半分は、となりのアパートのくすんだ壁でほとんど視界が塞がれてて、こっち側（左手側）に、路地に立ちならぶ電信柱と、弛んだ電線。道向こうの一軒家。路地が向こうのほうで通りにぶつかってて、そこを時々走り抜ける自動車や、自転車。背の高い街路樹の一部が、空に伸ばした手の先のほうだけ見えてる。

男　茶トラは、ここからいろんなものを見た。毎朝電線に留まりにくる小鳩を見たし、ツガイの雀の交尾も見た。リードにつながれて路地を歩いていく毛がふっさふさの犬を見たし、風に舞う黄色い砂塵を見た。

女　ある日、茶トラは、ガラス窓を伝い落ちていく無数の雨粒を見た。

そのとき青年は珍しく不在で、部屋の電気は消されてて、昼間なのに薄暗かった。

男　その暗がりのなかで、猫は流し台に直接のぼってシンクに山積みにされた食器に溜まってる水道水をペチャペチャ飲んで、そしてふと顔をあげると、

女　窓が、ぼんやり蒼く光っていた。

男　茶トラはしばらく動けなかった。

女　いつまでもいつまでも、ひっきりなしにガラスを伝っていく無数のしずくを見ていると、なんだか、ふらふら体が昇っていきそうな気がした。

男　猫は床に飛びおり、窓べりに近づいた。ヒゲの先がなんかピリピリした。

女　窓べりに近づくと、ガラス窓の向こうの家並みが白くかすんでいて、通りを走る自動車が水溜まりをはねあげていくのが見えた。黒い街路樹の枝が空に向かって背伸びしていて、その空は白くて、どこまでも広がっていて、その空の向こうから無数の雨が降りそそぐ。町がザァァとさざめく。

舞台上に、夏の陽ざし。

男　夏になると、玄関のひんやりしたたたきが、猫のお気に入りになりました。青年の靴と靴のあいだにべったり寝そべって、時々だらしなく腹を見せたりして、そこでむさぼるように眠った。玄関のドアは、建てつけが悪いせいで床との間にけっこうな隙間があって、そこに起こる呼吸のような風が、茶トラの毛を撫でていく。

女　ごくたまに青年が出かけたり帰宅したりするとき、ギイギイ音を立ててドアが開いて、外の景色がちらっと見えたりする。それも好きだった。時々、果敢にドアの開閉に合わせて脱出を試みることもあるけど、でもそれは、まだ一度も成功してない。

男　青年の足に蹴られたりしながら。いつも阻まれて。でも猫は、気を落ちつけるみたいにニ、三回じぶんの背中の毛を舐めると、それでもう蹴られたことはすっかり忘れて、またたたきにだらんと腹をだして、眠りはじめる。ドアと床の合間から入ってくる外気の呼吸にくすぐられながら、夢を見る。

女　青年は、部屋にいるあいだ何をしてるかというと、まあたいていはダラダラＴＶを観たりとか、そんななんですが、たまにあんまり暇を持てあますと、棚からパレットと水彩絵具を出してきて、あれこれ絵筆で色をもてあそびました。

男　それは傍から見れば、子供が泥ダンゴをつくるみたいに適当に遊んでるようにしか見えないけど、青年のなかには、なにか確固とした基準があるみたいで、その基準の見合った、気に入った色ができると、青年は無邪気に喜んで、それから、おもむろに部屋の中央にある水槽の水を抜きはじめる。

女　ベランダからバケツと電動ポンプをもってきて、水を抜いて、それからへっぴり腰になって水槽を、お風呂場の浴槽のなかに運んで、スポンジでごしごし洗いました。

男　流し台のしたの引き戸のなかには、大量のミネラルウォーターのペットボトルがダンボール箱に入ってストックされてて、青年はそれを、布拭きしたあとの水槽に、ドボドボ注いでいきました。

女　それから、青年はいよいよ筆とパレットを持ってきて、パレットのうえに完成した色をこう、筆の先にとって――青年の指先に、儀式みたいな緊張が、宿って――

男　青年は身を乗りだして、水槽のへりに手をかけて、透明な水面の間近まで顔を近づけて、じぶんの右腕の先の、手首の先の、ひとさし指の先の、さらにその先の絵筆の先端に、意識をおしつめて――

女　色を吸いこんでほんのわずか膨らんだ絵筆の尖端と、透明な水面とが、すこしずつ、すこしずつ接近して。でもそのふたつは、ほんの数ミリの距離をなかなか結びつかず、まるで永遠に接近していくみたいに思えて。

男　青年は、その無限に接近していく数ミリの空気圧に、肺をおしつぶされるのを感じて、その苦しさのなかに、彼の生活が裂開して裏返っていくのを感じる。

女　すると、その昂奮が指先に伝わってしまって、筆の先端が震えてしまって、

男　ああッ――

女　筆の先はあっけなく着水して、色が、水槽のなかにこぼれ落ちていく。

男　青年は、いつも失意のうちに、色が水槽のなかに溶けていくのを眺める。何度やっても、この儀式は一度も成功したためしがなくて、ただぐったり疲れてしまう。まあ、何が成功なのかは、彼自身にも分かっていなかったけど。

女　猫が来て、ちょうど一年が過ぎたある日、青年はコートを着こんでスーパーに出かけて、店で一番値段が高い猫の缶詰を買ってきました。

男　あと、じぶんの夕食の、コンロにかけるだけのレトルトの鍋焼きうどんと。

女　部屋に帰ってくると、ちょうど電話が鳴っていて、慌ててそれに出ると、田舎からの電話で、青年は「にわか饒舌」になってしゃべって。

男　電話が終わると、彼はひさびさにカバンからスケッチブックを取り出してきて、鉛筆を走らせ、いくつか空想上の生き物を思いつくままに描いた。

女　夕方になって、青年はコンロに火をかけて鍋焼きうどんを作りました。足もとで、猫がニャアニャア、エサをねだって、まとわりついてきて。

男　青年は猫エサの容器を、水道水で洗って、水気を切って、そこに今日買ってきた缶詰を開けて、新鮮な肉の匂いのするエサを盛ると、

女　いよいよ猫の催促がうるさくなって、ニャア、ニャア、ニャア、って鳴く猫の体温を、両足のあいだに感じて。

男　青年はしばらくその「おねだり」を愉しんでから、わざとゆっくりした動作で、床にエサを置いてやりました。

女　茶トラがエサに駆け寄って、そこで、たぶんいつもと違う匂いに気づいて。

男　容器に鼻を近づけて、匂いを嗅ぎはじめました。青年は、それをニヤニヤした顔で見下ろして。

女　そしたら、なんかいつもと違う匂いで、で、それがどうも、気に入らなかったというか、合わなかったみたいで。猫は、未練たらしい目つきでエサの容器を一瞥すると、ぷい、と去っていこうとしました。

男　青年がぽかんとそれを見て――

「は？」あわててどっかに行こうとする猫を抱えあげて、もう一度エサ容器の前に降ろして。強引に、こう、エサのほうに顔を差し向けて、

女　茶トラはびっくりして、また叱られる！　と思って、ダッとテーブルのほうに逃げていって、カーテンの裏に隠れました。

男　青年はしばらくそこに突っ立ったまま、天井の蛍光灯から、蛾の燐粉みたいなちちかちかする光りが降ってくるのを見ていました。

一、三、四。七、二、九。五、五、十……

女　しばらくすると鍋焼きうどんがグツグツ煮えたぎって、青年は火を止めて、それから足もとのエサの容器を拾いあげると、生ゴミ入れに（容器をひっくり返して、中身を捨てる仕草）ガン、ガン、って中身を捨てて、それからストックしてあった、いつものエサの缶詰を開けて、それを容器に入れて、また床に戻しました。

男　持ち手のところにふきんをかませて、テーブルまで鍋焼きうどんを運んで、それからずるずる言わせて、うどんを啜って。

女　茶トラは、その様子をカーテンの陰からこっそり伺って、青年がうどんを啜るのに夢中になると、おずおずと青年の後ろを迂回して、まだすこし、いつもと違う匂いの混ざったエサを、カゥ、カゥ、と食べはじめました。

男と女、しばらく、ずるずる、カゥ、カゥと、ものを食べる音を立てる。

雨音がしだいに高まってくる。

舞台奥の壁一面に、雨脚が光りとなって走っていく。

そこに、「2．水のない水槽」の文字。

2

男　どしゃ降りが数日つづいて、部屋のなかが汗とも湿気ともつかない匂いでじっとりする季節になると、バイオリズムの波というか、青年の目に急な活気が生まれて、慢性的な昂奮がそこから発電されだしました。

女　青年は別人みたいに、連日、画板の前に立って、作品づくりに熱中しました。

男　そして、ひときわ大きな画を描きあげると、その絵具が乾ききっていないうちから、数冊の本と一緒に、その画を抱えて、どこかに出かけていきました。

女　数時間して帰宅した青年の顔は、いつになく紅潮していました。そして、その翌日から青年は、朝起きて、昼前に出かけて、夕方に帰ってくるという、まっとうなサイクルの生活をはじめました。

男　猫は、青年が留守がちになっても特にこれまでと変わりなく、窓べりでガラスごしの家並みを眺めて、ぼんやりまどろむ。青年のいない部屋の空気はねっとり膨らんで、床を這うようにゆっくり流れる。

女　そんなある日、夜になっても青年が帰ってこない日がありました。猫のエサの時間はとっくに過ぎて、暗い部屋をニャアニャア歩き回ってもムダ。茶トラは、暗い部屋でぼんやり光る水槽の周りを、ことさら騒々しく走りまわって、それでもムダなのに気づくと、また窓べりにもどって、不貞寝をしました。

男　深夜、アパートの外廊下に青年の足音を感じて、猫が玄関に駆けつけると、ガチャガチャ鍵穴が鳴って、ドアが開きました。そして、

女　アー、ホントだー、猫がいるー！

男　という声がしました。聞いたことのない声。

女　アー、かわいー！　猫ちゃーん。

男　ぬっと青年の手が伸びてきて、宙に抱えあげられました。

　　――な、だから、いるっていったじゃん。ウソじゃないだろ？

女　ホントだー。オス？　メス？

男　オス。なあ？　ただいま。――と青年は言いました。うまく吃らずにしゃべってました。

女　こんにちは、猫ちゃん。あ、違う、こんばんわ、か。（と笑う）

男　青年と一緒に部屋に入ってきたのは、顎骨のよく発達した背の低い女で、遠慮もなく大口を開けて笑った。それからふたりして部屋に上がりこんできた。青年の手からぶら下がるコンビニの袋が、ガサガサ鳴った。

女　猫ちゃん、おいで。（笑う）人懐っこいねー、おりこーさん。――っていうか、おしゃべりだねー、お前。

男　ああ、そいつ腹が、減ってるんだよ。エサ、まだやってないから。夜。今日。

女　そっか、そっか。――と頷いて、それから女の興味は、猫から水槽に移りました。

女　え、何これ。水槽？　なんで何も入ってないの？

男　それから青年は、その水槽についての説明をはじめました。どのようにこの水槽がこの部屋に来て、なぜ空っぽになったのか。でも、長くしゃべろうとすると、どうしても吃るのを隠しきることができなくて、

女　何回も話の途中でことばが詰まるんで、なんか、途中から興味がなくなって。それでもまだしゃべろうとするから、もういいよ、と心のなかで思って。

男　青年も女のほうも、顔を赤く染めていました。ふたりとも酒くさくて、陽気で、そのくせふたりとも、どこか緊張している感じでした。

女　その夜、部屋の電気が消えて真っ暗になっても、女は帰ろうとしませんでした。茶トラは落ち着かない気持ちで、いつもの窓べりで、まどろんだ。

男　月の明かりがカーテンの隙間から洩れて、カーペットの一部を照らしていました。そのかすかな月明かりが、たっぷり夜を消費して、蒼い夜明けの光りに変わっていくのを、猫はぼんやり眺めていました。

女　まだ薄暗いなかで、女が目を覚まして、布団から立ち上がりました。ぼさぼさの髪を両手で押さえつけて、まだ寝惚けたような目で、しばらくずっと、布団のなかでまだいびきを立てている青年の顔を、じっと見下ろしていました。

男　それから大股に部屋を横ぎって、トイレに消えて、また部屋に戻ってくると、茶トラがエサをねだってニャアニャア鳴こうとするのを、

女　シイ、（おし殺した声で）黙って！

男　と叱りつけて、手早く身支度をととのえると部屋から出ていきました。

女　そのときも、ドアが開くタイミングで茶トラはまた脱出を試みて、でも女の太い足に蹴りもどされて、結局、また失敗に終わりました。

男　青年は昼前になって、ようやく目を覚ましました。目を覚ますなり、ぼんやり部屋のなかを眺めて、二日酔いの頭を抱えこんでウー、ウー、と、うなりだしました。

女　そこに腹を空かせた猫が不用意に近寄って、ニャアニャア鳴いてすり寄ったもんだから、

男　ついカッとして、

女　背中を掴んで——

女　背中を掴まれて——勢いよく本棚に投げつけられました。ギャッ！

男　猫はびっくりして部屋の隅に逃げていきました。

女　……猫を投げた手がなんかジンジンして、見ると、投げた拍子に背中の毛がけっこう抜けたみたいで、大量の毛が、指のあいだに残ってました。

男　茶トラは部屋の隅っこに隠れて、うっすら血の滲む背中のハゲを、せわしなく舐めはじめました。

女　その日、青年は呆けたように、夕方近くまで布団のうえでウダウダ寝ころんだり、座りこんだりしていました。一日ＴＶがつけっ放しになってて、でもうるさいのは嫌って、だから音声は消音されてて、部屋のなかには青年が寝がえりをうつ布団がこすれる音とか、畳のうえを歩く猫の足音とか、ときどき関節がポキッと鳴る音とか、深い息を吐く音とか、そんなものしか聞こえませんでした。

男　青年はその日からまた、部屋にこもりがちになって、というか、むしろ前よりも外出することが減ってしまいました。カバンからスケッチブックを出すこともほとんどなくなって、ホントになんにもせずに、一日がムダに流れていくのをぼんやり見てるだけ。水槽の手入れもしなくなったせいで、透明だったミネラルウォーターのなかには、白い半透明のモヤモヤしたものが漂って、それはまるで奇形のクラゲの群れのようでした。

女　そんなクラゲの幽霊みたいなものが浮いた水槽のアクリル板におでこをこすりつけながら、青年は何かブツブツ呟いたりしました。

男　彼が田舎から出てきたとき、貯金を切りくずして最初に買ったのがこの水槽でした。

女　ここに十二匹の熱帯魚を飼った。

男　昔、彼がまだ小学生だったころに学校の図書室の魚図鑑で見て、それ以来、彼の頭

のなかに泳いでいた飴色に輝くちいさな熱帯魚でした。

男　なめらかな艶を放つ十二匹の熱帯魚の群れは、この水槽のなかをゆっくりと遊泳して、互いに交差したり、身をひるがえして低く下降していったりした。

青年は、時間を忘れてそのゆったりした踊りに見とれた。熱帯魚の、水に溶けだすような模様に、だらしなく笑いを洩らしたりして。

女　でも、そんな浮かれた気分は、たった一晩しか続きませんでした。

男　翌朝――青年が目を覚まして、眠けまなこで水槽を見ると、

女　水槽から湯気が立っていました。

男　ハぁ？

女　駆け寄ってみると、水槽のなかに魚たちがいなくて、みんな、水面に腹をうわむかせて端っこに固まって浮いていました。

男　ハぁ？　なんで？

女　水槽内のヒーターのコンセントを、専用のサーモタットじゃなくて家庭用のコンセントに、普通に差しこんじゃったせいで、ヒーターが加熱を続けて、一晩かけて水槽の水を沸かしたせいでした。

男　湯気を立てる水のなかで、十二匹の飴色の魚たちは、赤い無生物の眼になって、ぷかぷか浮いていました。

女　青年は水槽から垂れているすべてのコンセントを引き抜いて、

男　目をそむけて網で、茹った魚の死体をすくって、それをコンビニのビニール袋におしこんで、

女　それを近所の公園の端に埋めてやった。

男　いや――ホントは、埋めてやろうと思ったんだけど、実際行ってみたら、普通に公園で遊んでる人とかいるし、なんかそこでしゃがみこんで土を掘って、とかできなくて――

女　できなくて？

男　――で、結局、居酒屋みたいな店の裏口のとこにあった生ゴミ入れに、投げこんだ。

それで、部屋に帰ってきたら、部屋が、さっきはあんまり気にならなかったのに、生臭い匂いが充満してて、それ嗅いだとたん、なんかもう、我慢できなくて――

女　できなくて？

男　吐いた。畳のうえに。酸っぱい匂いが鼻にツンときて、なんか、最悪だった。

女　それから彼はまた出かけて、コンビニでミネラルウォーターと、安物のコロンを買ってきて、部屋に戻ってくると、そのコロンをあちこちに振りまいた。

男　まだ生温かい水槽の水をベランダにぶちまけて、代わりに買ってきたミネラルウォーターをなかに満たした。

女　まだ喉もとに粘っこい吐き気があって、何度も生唾を飲みこみながら、畳のうえを掃除して、両手をゴシゴシ洗って、もう一回部屋じゅうにコロンを振りかけた。

ふたたび雨音が強まってくる。

女　青年はもともと、痩せてひょろひょろしてたけど、最近ではもうあんまりモノを食べなくなって、ガリガリになってきました。毎日、備蓄してるミネラルウォーターをがぶ飲みして、それで空腹をまぎらせて、ぼんやり部屋で日を過ごす。

男　じぶんがそんなだから、猫のエサの時間もよく忘れて、結果、不規則になって、猫は下痢になってしまいました。

女　あるうす暗い午後、ぼんやりまどろんでた青年は、急に立ちあがると、貧血を起こしてふらふらしながら、部屋にある水彩画具をかたっぱしから取りだしてきて、蓋を飛ばして、水槽のなかにぜんぶ、ぶちまけました。水槽の水が渦をまいて、黒く濁っていきました。

男　（水槽を凝視して）……な～んも見えん……もう、な～んも見えん……

女　青年はそれでも、じっと水槽のなかを見つめていました。

男　ゆっくりと日が落ちていきました。……水槽のなかの暗闇をじっと見てると、きりきりと内臓が締めつけられて、息が、苦しかった。外のまぶしい町に出ていくのも嫌だけど、このせまい暗闇にずっといるのも、嫌だ。

女　青年はそのまま、もそもそ布団のほうに這っていって、虫みたいに眠りました。

雨音が徐々に弱まり、おとずれる静寂のなか、ぴちゃ、ぴちゃ、と水の跳ねる音。

男　（顔を上げて）……なに？　何の音？

女　部屋の暗がりに響く、水の跳ねる音。青年が布団から顔だけ出して音のするほうを覗くと、水槽のうえ――

男　茶トラが、器用に水槽のうえに登って、前脚をふんばって、
女　そこからしなやかに体を伸ばして、水槽の黒い水を啜っていました。
男　その舌の音が、ぴちゃ、ぴちゃ。
女　水槽の黒い水が、部屋のなかと、布団にくるまったまま顔だけ覗かせる男の顔を映しこんでいるのが見えた。
男　その黒い水を、猫がぴちゃぴちゃ吸いとって、猫の腹が硬くふくらんでいく。
女　青年は、その様子を息をつめて見つめました。
男　暗闇に、ぼんやり猫の内臓が浮かんだ。
女　青年は布団から起きあがって、叩くそぶりをしてみせました。すると茶トラはびくっと反応して、水槽から飛び下りると、ダッと部屋の隅に逃げていきました。
男　青年は猫が逃げてからも、じっと水槽のほうを見つめていました。そして、久しぶりにカバンからスケッチブックを取りだすと、さっき暗闇に浮かんだ猫の内蔵を描きなぐっていきました。
女　翌朝、青年は重たい体をひきずって、水槽の掃除を始めました。寝不足でその目は真っ赤でした。
男　すぐに息があがってしまって、冷たい水のせいで手もかじかんで痺れたけど、その痺れた手で、青年はゴシゴシ、水槽を洗った。白い弾んだ息が、青年の口から何回も洩れて、ときどき盛大なくしゃみが起きた。――ックシャッ！　ックシャッ！
女　そして水槽の汚れを落として、きれいな布で拭きあげると、もとのテーブルのうえに水槽を置きました。
男　でも、もうミネラルウォーターをそこに注ぐことはせず、青年は、どこか晴れ晴れしたみたいな顔で、空っぽの水槽をまぶしそうに見つめました。
女　それから床の容器に大量の猫のエサをやって、インスタントラーメンを煮て、食べました。茶トラの背中にハゲがあるのに気づいて、以前田舎から送ってきてた黄色っぽい色の軟膏を指にとって、逃げようとする猫を捕まえて、背中に塗ったくってやりました。
男　そこまででもう青年のまぶたは限界に近いとこまできてて、力尽きたみたいに布団のうえにバサッと倒れると、布団に顔をうずめたまま長い息をもらして、水中に沈んでいくように眠りに落ちていきました。
女　昼の陽ざしが、布団のうえにきつい輝きの膜を張っていた。

男　青年が寝息を立てはじめると、茶トラはどっか物陰から出てきて、テーブルのうえの空っぽの水槽を見あげました。水を張っていない水槽は、どこか空威張りというか、虚勢を張っているみたいにも見えました。

女　茶トラはちょっとした好奇心に目を輝かせて、水槽のアクリル板に前脚をかけて、首をのばして中を覗きこみました。部屋に射しこむ陽の光りが、水槽のなかではひときわ集約されて、とてもまぶしかった。

男　まるで光りの液体に満たされてるようでもあった。

女　猫は、そこにひきこまれるように、身を柔らかくしならせて、水槽にすべりこみました。

男　とたん、猫の視界いっぱいに、ひずんだ部屋の光景が広がりました。

女　アクリル板についた無数の細かい傷のせいで、光りが攪拌して、その熱が茶トラの瞳孔を焼いた。

男　猫は総毛だって、まるで溺れるように、水槽から出ようともがいた、

女　でもいくら爪を立てても、アクリル板はつるつる滑るばかり、

男　何度も後ろ脚に力をこめて水槽のヘリに飛びつこうとしたけど、

女　床もつるつる滑って、まともな跳躍にはならなかった。

男　よけいに焦って、

女　透明のアクリルの板に囲まれた茶トラの声が、天井に突きぬけて部屋のなかを騒がせたけど、深い眠りに落ちた青年が目を覚ますことは、最後までありませんでした。

男　ガリガリ爪を立てて、全身の筋肉を強ばらせて、

女　猫は何度も水槽のヘリめがけて飛び跳ねて、

男　そして――

女　そして――

男　なんとか爪の先を、水槽のヘリを覆うアルミ合金の枠の部分に引っかけ、

女　そこをとっかかりにして、なんとか自分の体を引きあげて、

男　必死の思いで水槽から脱けだしました。

女　でも、その代償に、アクリル板とアルミ合金の枠のあいだに、猫の爪が、詰まったまま残されました。

男　茶トラは爪の剥がれた前脚の先から、点々と血を滴らせて、ひょこひょこ歩いてカーテンの裏に逃げこんで、

女　白く輝く家並みを向こうに透かすガラス窓に、身をつめ寄せて、
男　そこで昂奮を落ちつかせようとして、
女　軟膏の味のする背中のハゲを舐めはじめました。
男　青年のいびきが、水槽に撥ねかえって、
男と女　いつまでも部屋に反響していました。

男と女、人形のように生気を失う。
ゆっくりと溶暗。

（了）